明善同窓会 関東支部 会報

発　行：
明善同窓会関東支部会報委員会
連絡先：
meizen.dosokai.kanto@gmail.com
https://meizen.tokyo
関東支部HP　会報バックナンバー

ご挨拶

関東支部会長 昭和51年卒　内田直人

同窓生の皆様には支部活動にご支援、ご協力いただき感謝申し上げます。支部のお世話を始めて20年が経ちましたが、同窓会の使命は同窓生相互の親睦を深め、母校の発展に寄与することと考えています。特に支部は、故郷を離れ、学年や年代を超えた同窓生同士が母校明善や地元久留米の情報を共有し、発展を願い共感すること、併せて活躍する明善OB・OGのことを伝え、応援することではないかと思います。さらに言えば上京する明善生を温かく迎えることではないでしょうか。

さて、明善同窓会関東支部は、昭和54年に発足し第1回総会では中村八大氏（S25卒）のピアノ演奏が披露されたとのこと。先輩方のご尽力で発足し、46年間継続されてきましたがどうしても50代以上が中心となっています。20代から40代の若手も参加してみたい、参加してよかったと感じる同窓会活動を目指しています。今春も明善新卒業生には（卒業式前日の）同窓会入会式で関東支部や総会の紹介を行い、進学あるいは将来就職で上京時には明善の先輩方が温かく迎えてくれることを伝えました。また、大学生や若手同窓生で結成した学友会（旧学生の会）の集まりも開催され有意義な交流を賑やかに行っています。（別記事も参照）これらをきっかけに若い方々の参加も徐々に増えていますので、さらに交流の広がり、同窓生の輪が大きくなること期待します。

年に一度のこの会報だけではタイムリーな情報提供ができないため、一昨年から始めた「関東支部メールマガジン」は第16号を重ね、約900名の方々へ情報発信しています。国内外で幅広く活動する同窓生の公演・個展・スポーツなどの活躍を紹介し、皆さま方からの応援をお願いしてきました。

ネット時代とは言え、対面での同窓生同士の交流が一番楽しみです。今年の第39回総会は、6月8日（日）中央大学駿河台キャンパスの最上階19階のレストランで盛大に開催いたします。総会では「活躍する同窓生講演」として、救命救急医師・フライトドクターとして救急医療に尽力・活躍する、本村友一さん（H8卒）にお願いしています。ドクターヘリに搭乗し救命救急医療の最前線と未来像をお話いただきます。ぜひ総会・懇親会に奮ってご参加いただき、筑後弁で旧交を温めていただければ幸いです。

故郷久留米を離れても、久留米のことや明善の思い出を語り合うことで旧交を温め続けられる同窓会を目指し、さらには久留米や明善の発展、卒業生の活躍を応援していきます。引き続き皆様方のご支援よろしくお願いいたします。

「人間力」の向上を目指して

同窓会会長　昭和50年卒　内村直尚

明善同窓会関東支部の皆様におかれましては、同窓会の運営にご指導・ご鞭撻をいただいておりますこと、心よりお礼申し上げます。

昨年は6月2日に明善同窓会関東支部総会・懇親会に参加させていただきました。中央大学駿河台キャンパスの最上階19階のレストランを貸し切り、100名超の規模の開催に感激いたしました。その運営は、現役学生や若い同窓生での交流を進めるべく結成した学友会主体で行なわれ、今後若い同窓生を含めた交流が広がる期待を強く抱きました。

さらに、昨年10月19日（土）には、第57回明善大同窓会を創世において無事に開催いたしました。田鍋浩二実行委員長始め、昭和63年卒の皆様が「時を越え、世代を超えてはぐくむ絆」のテーマの下に開催され、往年の友との久しぶりの再開を喜び、共に語り合い、世代を超えた幅広い絆をはぐくむことができました。ご多忙の中をご臨席賜りました内田関東支部会長を始め、多くの同窓会関東支部の皆様には心より御礼申し上げます。

ところで、地域社会や国際社会に貢献するためには、優れた知性と「人間力」を養っていくことが不可欠です。

「人間力」とは、社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力です。「人間力」は、社会や自身の課題に気付き、意欲的に知識を得ようとする「知る力」、そして、自ら前に踏み出す「行動する力」、論理的に知識・情報を運用して創造的に考える「思考する力」、命題を行動によって結果に結びつける「実践力」、状況を把握し、人との繋がりをもって社会の一員としての役割を果たす「社会で生きる力」という5つの構成要素で捉えることができます。この「人間力」を向上させることが、相手の立場を思いやって正しく分かろうとする「共感的理解力」、自らと向き合い社会的ルールの尊重と自己管理を行う「自己統制力」、相手から発信された情報を傾聴して受け止め、その意味を理解し、それに対する自らの応答を正確かつ効果的に表現し、相手に向けて情報として伝達する「コミュニケーション力」の醸成に繋がります。学問や仕事の力量、能力は高いに越したことはありませんが、人としての魅力、生きていくための総合力、すなわち「人間力」が大きな成果や幸せを生み出します。私も人間力を高め、明善同窓会長としてリーダーシップを発揮して、活動していく所存です。

最後に、昨年11月5日、前同窓会会長の眞木大樹さんがお亡くなりになり、12月11日に萃香園ホテルで開催されたお別れ会に参列いたしました。11年間にわたり会長として御尽力なされ、多くの御功績を挙げられましたことに改めて敬意を表しますとともに、謹んでお悔やみ申し上げます。

今後も、同窓会会長として、明善同窓会および明善高校の更なる発展に少しでも寄与出来るよう励んで参る所存です。至らない点も多々あろうかと存じますが、会長を始め同窓会関東支部の役員の皆様、会員の皆様には引き続きご支援・ご協力をお願い申し上げますと共に、皆様の御多幸と御健勝をお祈り申し上げご挨拶と致します。

ご挨拶

校長　中島敦雄

明善同窓会関東支部の皆様におかれましては、日頃から本校並びに本校生徒に対しましてご支援を賜り、誠にありがとうございます。心より厚くお礼申し上げます。

さて、令和6年度も明善の生徒たちは、明るく元気よく、自由闊達に学校生活を送っています。全日制及び定時制おいて、コロナ禍の影響を受けていた教育活動も元通りとなり、職員一同、生徒たちの主体性を大切にしながら人材の育成を図っているところです。

今年度本校は、福岡県より2つの表彰を受けました。一つは、福岡県教育文化表彰、さらにもう一つは福岡県優秀校表彰です。いずれの表彰も教育分野に関する福岡県を代表する表彰であり、これまでの本校の教育活動が高く評価されたものと確信しています。

学校行事では、昨年9月に実施しました大運動会は、来場者を圧倒する出来映えで、明善生の底力を感じることのできる運動会でした。準備期間が限られていたにもかかわらず生徒自らの手で創り上げ、明善の伝統が揺るぎのないものであることを示してくれた立派な大運動会でした。

10月に実施した創立記念講演会では、元福岡県教育長であり、現在公益財団法人福岡県スポーツ振興センター理事長で本校卒業生の城戸秀明氏をお招きして講演をいただきました。生徒だった頃の思い出話や社会に出られてからの話など生徒にとって大変示唆に富んだ内容であり、講演終了後には多くの生徒が質問をするなど貴重な機会となりました。

また、11月下旬には全日制の修学旅行が実施されました。今年度の修学旅行は、目的地を国内（東北地方）または海外（カンボジアとベトナム）のいずれかを生徒の希望によって選ぶ選択制で実施しました。国内修学旅行は、東日本大震災と震災からの復興に関する学習を主なテーマとして宮城県と福島県を訪れました。他にも観光で岩手県の平泉や、東北大学を訪問するなど充実した内容でした。

海外修学旅行については、初めて海外を訪れる生徒も多く、最初は緊張していましたが、行程が進むにつれて随分と慣れ、楽しんでいる様子でした。カンボジアでは、アンコールワット遺跡群などの観光や現地の小学校訪問を行いました。ベトナムでは、ホーチミン市にあるレホンフォン高校

との異文化交流を実施しましたが、大変盛り上がり、最後は現地高校生との別れを惜しんでいる生徒もいました。

また、部活動においても優秀な成績を収めてくれています。全日制では、陸上部、水泳部、化学部、美術部、放送部、定時制では陸上部が全国大会に出場しています。その他にも多くの部活動が県大会等に進むなど、日頃の練習の成果を発揮し、よく頑張ってくれました。

現在、学校の方は、高校の推薦入試も始まり、年度末に向けて少々、慌ただしくなってまいりました。3月1日には学校で最も大切な行事の一つとも言える卒業式を行いましたが、今年度は体育館工事のため、久留米シティプラザでの実施となります。今年の卒業生の中からも、関東の大学等に進む者が出てくると思いますので、その折はよろしくお願いいたします。

すとともに、引き続き、母校明善高等学校に対しまして、ご支援を賜りますようお願い申し上げまして、ご挨拶とさせていただきます。

第38回関東支部総会を開催

昨年6月2日（日）に第38回関東支部総会を中央大学 駿河台キャンパス19階レストラン「Good View Dining」を貸切り、総勢120名が集い開催した。初めての会場、眺望も良く明るく広々とした会場で和やかな雰囲気で催すことができた。来賓として地元より中島敦雄校長、内村直尚同窓会会長にご臨席いただき、また東京で活動する同郷高校の各同窓会関係者もお招きし、筑後弁で旧交を温めた。

総会・懇親会の司会は昨年に続き伊東・山本（S55卒）が担当し、名司会で会場を賑やかに盛り上げた。総会では内田会長の挨拶、中島校長よお話しいただき母校生徒たちの活躍ぶりを聞くことができた。古賀事務局長から事業報告・計画などを報告、また副会長に伊東美晃さん（S55卒）、秋永佳世さん（S56卒）が承認された。総会後半では、内村同窓会会長に「よい睡眠の話」と題して講演をいただき、ユーモアも交えた長生きの秘訣をみな熱心に聞き入った。さすがに居眠りする者はいなかった。

懇親会は、最年長の大坪修先輩（S32卒）の乾杯で開始し、同年代で集まった各テーブルで賑やかに歓談が行われた。余興タイムでは、スポーツクライミングでオリンピックを目指す緒方良行くん（H28卒）がゲスト登場し、幼いころ岩登りを始めたきっかけや2月に日本一に輝いたことなど映像を交えて語り、みんなで応援を送った。また、大同窓会幹事団（S63卒）も登壇し参加を呼びかけた。その結果、関東からも大同窓会へ多数駆けつけたとのこと。

40歳以下の若手同窓生10名も登壇し、各自自己紹介で会場を沸かせた。特に就活中の大学生は自己PRに加え就職希望先も発表し出席者も興味深く聞き入った。抽選会では学生がくじ引きし豪華景品を手にした同窓生が歓声をあげていた。最後はいつもの白旆の歌、別府相談役（S41卒）の音頭で締めくくり、また来年元気に再会することを誓った。

会長挨拶

総会前の歓談

関東から大同窓会幹事に参加して

昭和63年卒　萱谷　聡

私たち昭和63年卒業生が幹事を務める2024年大同窓会の1年ほど前から、久留米の実行委員会メンバーとのグループLINEやオンラインでの打ち合わせに参加した。実家の引っ越しにより久留米に帰る機会がなくなっていた私にとっては、画面越しとはいえ37年ぶりの同級生との再会はそれだけでも十分懐かしいものであった。

「40代以下の若い世代の参加者を増やし、明善同窓会を持続可能なものにしていきたい」という田鍋実行委員長の思いをどのようにして実現するか、それが一番の課題であった。

8年前に関東支部同窓会の幹事を務めた経験が少しでも役に立てばと思い、「せっかくの大同窓会だから、先輩・後輩とのタテの交流を促す企画をやろうよ！部活動や出身中学毎に交流できる場や時間を設けられないかな？」と提案した。規模が大きく会場が2つに分かれる、空いている時間がないなど、いくつかの制約がある中で、同級生の一人がメッセージカードの企画を考えてくれた。コンセプトは「世代を超えて声を届けあえたら」…、うん、なかなかいい！カードのデザインや当日の流れなどをLINEでやり取りして企画を練り上げていった。

幹事団集合

第58回明善大同窓会のご案内

実行委員長　平成元年卒　近藤大輔

○日時　10月11日（土）
14時開始（13時受付開始）
○場所　ホテルマリターレ創世 久留米
○スローガン　『そうだ　同窓会、行こう。』

明善同窓会関東支部の皆様、いかがお過ごしでしょうか。今年の干支は、乙己（きのとみ）で「努力を重ね、物事を安定させていく」という意味合いを持つ年とされているそうです。まさに、私達に課されている命題に向けて、やるべき事を暗示しているようであります。

さて、第58回明善大同窓会の当番幹事である平成元年卒（H1会）は、高校時代は校訓である「克己・盡力・楽天」のもとに各々が懸命に過ごし、社会人になってからは、バブル崩壊後の荒波に揉まれながらも逞しく、仲良くやってきました。

今回のスローガンである「そうだ　同窓会、行こう。」は、明善卒業生が気負うことなく、気軽に参加し、楽しく過ごせる同窓会をイメージしています。偉大なる先輩方が築かれた伝統を重んじながら、H1会のカラー出して、参加された方の思い出に残る同窓会を目指して準備に勤しんで参ります。

関東支部の皆様方におかれましては、何かとお忙しいとは思いますが、10月11日は久留米にお越しいただき、恩師や同級生、先輩や後輩との楽しいひと時をお過ごし下さい。私達H1会が丹精を込めておもてなしをいたしますので、どうか奮ってご参加ください。

H1会
インスタグラム

スローガン掲げて集合

そして迎えた大同窓会当日、どれくらいの参加者がメッセージを書いてくれるのか心配ではあったが、想定を超えるみなさんにメッセージカードを書いていただけた。メッセージを書くことで、あの頃の自分や先輩・後輩に思いを馳せていただけたら、そしてそこから世代間の交流が少しでも生まれたのなら、この企画は大成功だったと思う（みなさんのメッセージはこのサイトでご覧いただけます：https://meizen57th.studio.site/2）。

応援団演舞

実行委員の様々な施策の効果で、若い世代の参加者も増えたようだ。今回の大同窓会を通して、「また来年も参加しよう」、「来年は友達誘おうかな」と思っていただけたなら、63会一同この上ない喜びである。

そして私自身にとっても、30数年ぶりに同級生と文化祭をやり遂げたような充実感はやっぱりいいものである。実務面ではなかなか力になれないオンライン幹事であった私の意見を聞き入れてくれた田鍋実行委員長、そしてその意見をメッセージカード企画というかたちに具現化してくれた同級生に心から感謝したい。

混在都市・郷里での回想

昭和29年卒　長末榮一

令和4年、私用で久留米に帰った。30数年前とは異なり、郷里は大きく変容していた。ビル群が立ち並びマイカーやトラックなどの交通量の多さに驚いた。まさに「現在」と「記憶」の混在都市であった。下駄履きに自転車での通学の高校時代には予想もつかない生活空間に化していた。

幼き日、父と釣りをした「筑後川」の美しい河岸は昔の面影をなくしていた。久留米藩主・有馬家の菩提寺、臨済宗の梅林寺は区画整理でコンパクトにまとまり規模が縮小していた。その帰りに立ち寄った母校「明善高」は当時のグレーの鉄筋校舎がモダンな色彩に変わり、今日のＩＣＴ教育を推進するＧＩＧＡスクール構想を実践する場にふさわしい佇まいになっていた。

校門の鉄柵や門柱は以前と同じだが、校章が金箔になり校門の入口には「天明3年（1783年）藩命による学問所「明善堂」」との立て札があり、開学以来の沿革が書いてあった。「明善」の校名の由来の記述はなかったが、儒教の経典「四書五経」の中の一つ「大学」の冒頭にある「学問の完成として習得すべき道は。英明な徳を身につけて世界を明るくし、人を愛し、常に最高善の境地に至る」に基づく。この教えは、東京都立高校で長年教鞭をとった私にとって、生徒を教育する上での心情でもあった。

校門に入って右側にある「同窓会館」は明治44年「高良台周辺での陸軍の九州大演習の折、明治天皇の行在所を改修した建物である。昭和37年「同窓会館落成記念誌」が手許にある。以前その行在所の前庭は一面芝生で寝転んで雑談にふけった。見上げる天空は紺青の海のように雲一つない日もあれば、真綿のような白雲が静かに流れる日もあり、学びに疲れた心を癒やしてくれた。しかし、久しぶりに訪れた行在所は改修され、眼前の庭は一面に小石が敷き詰められ蒼然とした雰囲気に包まれていた。

1994年の校門と旧校舎

また、校門に入った左側には、以前図書館と、その傍らに秋になると芳香のある橙黄色の花が咲く金木犀があった。ともに跡影もなくなってしまい、若き日の思い出の建物と常緑の小高木が姿を消していた。時の流れがすべてを変えたのである。「現在」と「記憶」の混在の中で、私は言い知れない寂しさを感じた。しばし呆然と立ちすくみながらも同時に、母校明善での学びが私に人生を強靭に生き抜く人間力を育成してくれたことに感謝した。

この私の母校への思い出について、経験を共有し共感することのできる同窓も多くいると思う。泉信也氏（S31卒）もその一人であろう。氏に平成11年某国立大学で教員志望者を対象に講義をした資料を贈呈したことがある。その返信を最近偶然に見出した。当時は、参議院議員であった氏が予算委員会で教育問題を取り上げ、それが大きな反響を呼んだという内容であった。氏にはその後いろいろとお願い事をしている。紙面を借りて厚く御礼を申し上げる。

私は今年3月、90歳（卒寿）になった。多くの同期の仲間は他界したが白寿を目指す。今日の地球温暖化やＡＩなどによるデジタル空間とリアル空間の超スマート社会（ソサイアティ5.0）への志向、ウクライナやパレスチナの戦乱の世界を同窓の諸賢とともに生き抜くプランを構想している。

藩校明善の校訓、克己・盡力・楽天を生きる力のマグマとし、自由と平和を希求し、自然を畏敬し、互いに力強く豊かに生き抜こう。

ブダガヤ瞑想体験

昭和43年卒　田村（立石）真一

コロナの最中に、今まで興味はあるものの纏まった時間が取れなくて手付かずだった事をしてみようと思いました。その一つが瞑想です。中村元先生の仏教講義をユーチューブで100時間くらいは聞いたと思います。仏陀が何を悟ったのか無性に知りたくなり、頭で理解するだけでは無理で瞑想が必須という事なのでゴエンカ先生のヴィパッサナ瞑想道場に申し込みました。しかし、当時コロナに罹患した老人の死亡率が高いと喧伝されていた時期でしたので、年齢制限で断られました。何をするかはユーチューブで略共有されていますので、一人でリトリートをやりました。本来1日10時間・10日間の瞑想修行ですが、我流で1日2時間・60日間続けました。途中、禅で言う魔境らしき状態も経験しましたがオンラインの助言を得て事無きを得ました。

40日くらい過ぎた頃に何らかのスイッチが入り意識の変容が起きました。以来、精神的なものに惹かれるようになり、仏陀の足跡などの巡礼や複数の流派の瞑想リトリートに参加しています。印象的なのは30代～40代の若手の参加者や経済活動を一巡した経営者などが多く、現行の資本主義に代わる（或いは補足する）新たなシステムを模索している様に思えます。若かりし頃の私たちがヒッピー運動や学生運動に傾倒した心情と軌を一にするものがあるのかも知れません。個人的には、慈悲の瞑想と死を直視するバルドーの瞑想が好きで、週に1回は自分が死に行くプロセスをシミュレートしてリフレッシュしています。因みにダライラマは毎日6回なさるそうです。死に対する恐怖が薄れ、寧ろ安らかな死が訪れるのを心待ちにしている様な気もします。

仏跡巡礼ブダガヤ／インドにて

熊野古道にて

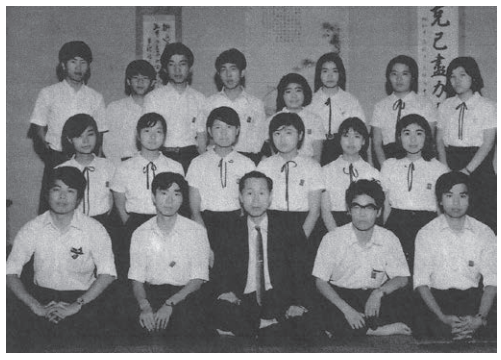
「明善新聞」と葉室麟

昭和45年卒　彌永一二三

葉室麟こと本畑雄士（彼自身は本名を公開していないとのことであるが、ウィキペディアには既に記載されているので、ここでは本名を使わせて頂く）君とは、昭和42年に明善に入学した直後から、卒業までの3年間、一緒に新聞部に所属し

た。当時、新聞部では、確か、タブロイド判4面の「明善新聞」を年に2、3回発行していた（と記憶している）。部室は、当初は体育館脇の古い長屋の一角にあり、その後、北校舎の2階に移った。ちなみに、医師で作家の帚木蓬生氏も明善新聞部に在籍していたとのことだが、5年先輩であり、直接の交流はない。

活動は、記事の企画、執筆、編集は勿論だが、近隣の商店等に広告を依頼して周り、発行費用の一部に充当したりもした。また、印刷段階では、出張校正と称して、堂々と授業の公認欠席扱いにしてもらい、一日がけで、博多の印刷所に出かけて校正を行うことになるのだが、そこで何時も昼食をご馳走になるのが、楽しみの一つだった。3年の時、本畑くんは、論説委員となった。編集会議では鋭い指摘や意見を述べていたが、彼の執筆する論説は、後日の文筆家としての大成を充分彷彿させるほどに優れていた。普段はどちらかというと寡黙なほうであったが、時々、ダジャレを発することもあった。部室の隣にちょっとした空き地があり、皆でよくバドミントンをしていたが、本畑くんは、お世辞にも運動神経が良いということはなく、シャトルを追うときの彼のドタバタとした足の運びは、今でも微笑ましく思い出す。また、夏には、毎年、2泊3泊で由布岳の麓や人吉などへキャンプにも出かけたが、新聞部では、卒業後も大学生の間は、キャンプに参加するのが恒例でもあった。


昭和45年卒業アルバムから（前列左端が本畑君）

その後、彼はどこかの新聞社の記者をしているということは聞いていたが、お互い多忙な時期でもあり、しばらくの間は、音信不通の状態であったが、直木賞を受賞したあたりから、お互い所在も判明し、また新聞部の同期の仲間で、年に1、2回集まり、旧交を温めていた。もうその頃は、昔のイメージとは異なり、貫禄もでてきて、寡黙なところも全くなくなっていた。直木賞受賞後も久留米で執筆活動を続けていたので、その理由を聞いたところ、やはり久留米が一番良いし、今は、パソコンとネットがあれば、資料調べも楽だから、今後も東京なんかには移らないと言っていた。一時、週刊新潮に「古都再見」と題して連載コラムを書いていて、その中では、さも京都に住んでいるかのような内容であったが、よく聞いてみると、記事の建前上、その期間だけ京都にマンションを借りてはいたが、実際はたまに久留米から京都に出かけていくだけとのことであった。また、「銀漢の譜」が発表された時に、明善の応援歌から取ったのかと聞いたら、すぐに「白旆の歌」を思い出したようだが、「いやその時は全く意識していなかった。でも、どこか記憶の深層に残っていて、無意識にそれを採用したのだろう」と語っていた。

一時新聞部にいたマドンナが今も久留米でラウンジを経営しているが、いつか一緒に行った時に、著書にサインを頼まれ、「これまで高嶺の花で声もかけられなかった人から、サインを頼まれるなんて、直木賞を取って、これが一番のご褒美だな！」とお茶目たっぷりに喋っていたのを思い出す。しかし、つい先日、そのマドンナに聞いたところ、新聞部時代には、広告依頼のために、二人でよく商店周りをしていたとのことであったので、彼のユーモアだったのだろう。

2017年春に、新聞部の同期生が体調を崩し、入院したことがあったので、彼にもメールで連絡した。その時は、自分も近々見舞いに行くつもりだとの返信があった。彼は、多忙にも拘らずメールには必ず返信するという律儀なところがあった。そしてそれが彼との最後のやりとりとなり、その年の年末に新聞で訃報を聞くこととなった。おそらく、直後に深刻な病気が判明し、治療に専念せざるを得なかったのだと思っている。

今も存命して執筆していたら、令和の司馬遼太郎や藤沢周平と言われたのではないかと、自分と同じ歳の早すぎる逝去を残念に思っており、御冥福を心より祈念する次第である。

安積疏水と久留米

昭和42年卒　高山喜一郎

赤坂の整体マッサージ店で知り合った友人で郡山出身の男性。面白い人で話を聞けば、海外経験豊富でコマツ製作所退職後故郷郡山市のボランティア団体がんばっぺチャリンコと言う観光案内グループメンバー。久留米市とは姉妹都市ですよもうすぐ50周年迎えると言われ、はぁ本当ですか？知りませんでしたぁ～としか言いようがありませんでした。その後グループで久留米市を表敬訪問したいので、ふるさと大使の高山さん仲を取り持って、と言う話になり市の協力を得て、久留米市観光ボランティアガイドの会が筑後川を望む水天宮、篠山城、高良大社、青木繁生家、ブリヂストン工場等を案内してくれ感激続きだったとの事。面目躍如。

その折姉妹都市になった縁が安積疏水だと知りました。その事もあって翌年郡山に行く事になりました。郡山は野口英世博士の出身地位しか知らなかった僕は有難いことにウィキペディアを見て俄勉強して向かいました。招待された場所は野口英世博士の活躍の場メキシコシティ市と郡山市が姉妹都市でメキシコの著名画家オブレゴン氏を迎えての個展会場でした。猪苗代湖、安達太良山、安積疏水の絵が並んでました。歓迎会の中、隣に品川萬里市長が座っておられ絵の話から郡山市立美術館で数年前久留米市と美術交流展をやったとの事、青木繁が大好きだと言われて、僕の母方の祖父の長兄が青木繁になりますと言ったら、大喜びでこの会場終わったらその交流会の時の図録を渡したいとわざわざ届けて頂いて誠実な市長に感謝。又会って話したいと声かけていただきました。

前置きは長くなりましたが、皆さん安積疏水ご存知ですか～？昔中学生の頃か習った事がある気がする程度でしたが、知る程に驚く事ばかり、郡山で出会う方出会う方、久留米のお陰で安積疏水が出来て今の郡山がありますとの声にビックリしました。明治時代初期、時の明治新政府の大久保利通公が猪苗代湖から水を引いて安積原野を肥沃の土地になる様開拓する事が東北の郡山の発展に不可欠であると国家予算を組み全国の9藩に声をかけたが翌年暗殺の憂き目に遭い、その意思を伊藤博文公が引き継ぎ実行。筑後川の治水灌漑で実績のあった久留米藩に武士家族の救済策として声がかかり、いち早く1，444キロ離れた郡山へ瀬戸内海を経由して141世帯585名が明治11年11月11日入植。その時の郡山の人口は2000人程度だったとの事。嘸かし大変な決意を持っての大移動。人々は望郷の念もあって水天宮を造り、その周りは久留米町として残り、久留米開墾記念館、久留米町公民館も隣接している。令和6年は久留米との姉妹都市として49年、郡山市市政100年に当たりました。がんばっぺチャリンコの会の方々は久留米での歓迎のお返しにと、その時お世話になった久留米市ボランティアガイドの会の方々を招待したいと申し入れがあり実現、記念日の11月11日に郡山市訪問となった。岩崎会長3名の高齢？の女性連は遠路遥々の旅をもろともせず久留米絣の法被姿でがんばっぺチャリンコメンバーと共に市庁舎へ、品川市長を中心に職員の方々はくるっぱのぬいぐるみ抱いて玄関でのお出迎え、温かいおもてなしの心に感動の対面となりました。

次の日は朝から好天に恵まれ安積疏水の由来の開成山大神宮がある公園をポールウォーキングのメンバーと史跡巡り。スターターは市長さん。一汗かいて心地よく完走。夕方からボランティア団体のリーダー宅で打ち上げパーティーで大盛り上がり。僕は先に失礼して帰路に着きましたが、久留米3人組はそのままご自宅に厄介になり、次の日猪苗代湖に案内され疏水の引き入れ口を見せてもらったとの事。感動を胸に久留米への帰路についた。思い出多き旅になったと報告を受けました。

KORIYAMA×KURUME 50th ANNIVERSARY FRIENDSHIP TOWN

久留米郡山姉妹都市提携
50周年ロゴマーク

久留米市HP姉妹都市情報

世代を超えた繋がり

昭和56年卒　野中（池田）美由紀

私は、大学卒業後、SEとしてM銀行のシステム部で30歳まで勤め、その後出産を経て現在の株式会社日本レーザーで総務と会長秘書として30年近く勤めております。明善高校関東支部の同窓会に初めて参加させていただいたのは56年卒メンバーが幹事の年でありました。それ以前はお恥ずかしい話ですが、大学進学で上京して以来、横のつながりはほとんど有りませんでした。関東支部同窓会に参加させていただくことで、多くの同期が関東に在住し活躍していることや、先輩方が、明善からの卒業生が関東で活躍できるように多方面でご尽力されていることを知ることが出来ました。

また、そんな私ですが、ずっと関東で頑張った甲斐が有ったのは、親友が関東へ転勤が決まり、ここ2年間は彼女と関東支部の同窓会へ参加できることです。実は彼女のお嬢さんも明善の後輩なので、今年はぜひ一緒に参加しようとお誘いしています。「親子で同窓会へ出席なんて素敵だなぁ～」と羨ましい限りです。私自身は、母校愛がそれほどあるとは思いませんが、ただ自分の子供の年代の方々が、後輩として同窓会に顔を出されているのを拝見しますと、何かしてあげたくなる親心が沸いている昨今でございます。

そんな中、2年程前にたまたま弊社への商談で写真の芙蓉総合リース株式会社の村尾さんが来社され、対応した私の上司が、彼女のご出身が久留米だという事を知り、私に紹介してくれました。村尾さんとお話ししていて明善卒だという事が判った時には、何とも言えない嬉しさがこみ上げてきました。

その後、時々村尾さんがいらっしゃる商談にはお声がけをいただきますが、気持ちはすっかり村尾さんを応援する側に回っている昨今でございます。今年は是非、村尾さんにも同窓会にお越しいただき、多くの同期や先輩後輩の方とお会い頂き、人生の財としていただければと思っております。そんな繋ぐ役割を緩く長く紡いで行ければ私の関東での半生も明善関東支部メンバーとしての意味があるのではないかと思うこの頃でございます。

来社された村尾さんと

よいかい喜寿祝賀旅行・・新緑の京都巡り・・

喜寿祝賀旅行幹事　昭和41年卒　龍頭正博

「次は10年後ばい」、「次は7年後ばい」と、還暦、古希に続け、喜寿祝賀旅行が約束通り実現。60名の参加を得て、昨年5月19日から2泊3日の旅程で実施。後期高齢者に優しくと、西本願寺隣の京都東急ホテルに2連泊。初日は、東京組と久留米組が京都駅で合流。2台の貸切バスで京都観光がスタート。最初に東寺を訪れ、五重塔、立体曼荼羅の至宝を、次に平等院鳳凰堂を訪れ極楽浄土の平安文化を満喫。次は江戸時代に開創された中国明朝様式の萬福寺を見物、そして最後に醍醐寺を訪問。「醍醐の花見」ならぬ「桜若葉」が小雨に映える中、為政者の興亡を思い描きながら巡り1日目の観光を楽しく終えてバスは今宵の宿へ。ホテル宴会場にて誰もが最も楽しみにした「喜寿祝賀の宴」を開催。卒業時の顔写真付名札を胸に付け、テーブルに着席。58年振り、或いは古希旅行以来の再会を喜ぶと同時に「あんた誰ね」との問いかけに胸の名札を指さして「○○たい」とのやり取りも聞こえた。物故者68名に黙祷を捧げた後、粉川美穂子さん、梁井俊男君の司会の下、井上賢一君の開会の辞、佐々木芳文君の献杯・乾杯で開宴。スクリーンに投写された卒業時の写真を背に、ビフォーアフターをお披露目しながら明善の思い出、近況報告等々、元気で溌剌としたスピーチが会場を沸かす。フルコースと美酒を味わいながら話が弾み瞬く間に時が過ぎ、愈々クライマックス。白組応援団長だった井上賢一君が孫息子の明善制服に身を包み、白長鉢巻き姿で登壇。喜寿とは思えない若々しい所作と力強い声で巻頭言とエール。全員で白旆の歌、校歌を斉唱。老いて尚盛んな一同が、明善時代にタイムスリップ、「嗚呼青春の饗宴」を繰り広げた。

2日目は、それぞれが思い思いの観光を楽しめるように4グループに分かれて定期観光バスと専用観光バスに分かれて各地を巡った。そして夜は再度一堂に会して京都劇場に隣接する食事処でミニパーティー。前夜の宴の続きとばかり思い出話に再び盛り上がった。

「次回は米寿の宴」との話が出たが、米寿まで待つのは長すぎると言うことで、「次回は傘寿の宴」に決定。3年後の2027年10月開催の「明善大同窓会」の日程に合わせて久留米で集まる事にした。

最終日は、3日間全コース参加の46名が1台のバスに乗車。金閣寺、龍安寺、仁和寺を巡った。金閣寺は開門早々だったが既にインバウンドと修学旅行生で溢れていた。金閣寺の近くで早めの昼食。その後、龍安寺を訪問しエリザベス女王が絶賛した15個の石が配置された庭で暫し黙考。最後に仁和寺を訪れ荘厳なたたずまいの金堂と五重塔を見物後京都駅に向かった。京都駅では修学旅行生でごった返す中、思い思いにお土産を購入。東京組は上りホーム、久留米組は下りのホームに、別れを惜しみつつ帰途に着いた。今回も古希旅行と同様に、西鉄旅行で活躍中の松本健一さん（恩師松本勉先生のお孫さん）の協力で快適な旅が実現。3年後の「傘寿の宴」もお願いしたいものだ。「次は3年後ばい」。

関東51会5年ぶりに開催

昭和51年卒　高吉晋吾

今年の1月26日、昭和51年卒業生は5年ぶりの関東51会同窓会を新橋の中華料理店新橋亭で開催しました。幹事の内田君、岡本君、山下君の尽力により男子15名、女子2名の総勢17名が参加しました。コロナ前は30名程度が参加していましたが、今回女子の参加が少なかったのが少々残念でした。会自体は久しぶりの開催でもあり、話が弾み、あっという間に予定の3時間が過ぎました。途中席替えを経て概ね皆と話をできるようにとの幹事の心遣いもありました。

残念ながら亡くなった同期生の報告もあり、高齢者の仲間に入った我々にとり5年間のブランクがいかに大きいかを感じました。主な話題は年相応に、健康や病気、特に最近治療を受けた人の話は我が身にも起こるかもしれないという危機意識からか懸命に聞いていました。また、今時の嫁姑関係での留意事項や孫のこと、一度定年を経た後の現在の仕事のこと、老後の住まいや自宅のリフォームのことなどです。かつては全員に求められた近況報告は、幹事の元航空管制官山下君の時間厳守のコントロール下、現役パイロット・キャプテン田中君によるラストフライトの予定や親子二代パイロットの話、NHK副会長井上君による最近のメディア問題など、もっと聞きたかったのですが、非情にも途中で打ち切りが宣告され、見事定時に終了しました。

次回は6月8日明善関東同窓会の後で幹事は宮原君、さらにその次の幹事も自薦で、石里君、大井君、吉永君にすんなりと決まり10月か11月に開催することとなり、再会を約して解散となりました。その後、話し足りない人、飲み足りない人は、三々五々二次会に向かいました。関東51会という形であと何回集まることができるか分かりません。今回参加できなかった人もまた元気な顔を見せてほしいと思います。明善に通った3年間が私たちのかけがえのない財産であることを改めて感じた新年の一日でした。

65歳特集「昭和53年卒」

実質的な定年年代の皆さんの特集を毎年お届けしています

◆昭和53年卒関東明善会紹介

昭和53年卒　山嵜信明

50年前の昭和49年、中学3年生だった私は友人と久留米市の中央公園に完成したばかりの陸上競技場へ、インターハイを観に行きました。確か男子1,500m走だったと覚えていますが、2位の選手を30mほどブッチギって優勝した選手がいました。それがのちの瀬古利彦選手、現在の日本陸連理事でした。

その年の秋、〝ミスタージャイアンツ〟の長嶋茂雄選手が引退し、涙したあと、高校でも野球を続けようと考えていた私は、久留米球場のこけら落としの試合、久留米商業―南筑戦を観戦。明善が出ていなかったことが残念でしたが…。

およそ4ケ月後に明善に入学。いま同窓会で会っている、53会のみんなと3年をともに過ごすことになったわけです。私たちは日本の高度成長期の前年に生まれた世代ですが、中学・高校時代はそんな具合に久留米市がまだまだ活況を保っている時代で、みな目を輝かせている、とてもいい時代でした。

その同級生とは48歳のとき、関東支部同窓会の幹事役を一致協力して務め、その後は年に2回の同期会を開いています。土曜日の2時ぐらいからの飲み会なので、ときには4次会になることも。あるいは、ゴルフをやったり、横浜在住の連中で分会をやったり、5年前には還暦記念として、修学旅行で行った善光寺・松本城へ1泊旅行したりと、さまざまな形で楽しんでいます。

こうしたきっかけを与えてもらった高校のよき伝統と、それを築き、継承してこられた先輩方に心から感謝しております。

最後に、同期の連絡係として、毎回、事務局を引き受けてくれている渡部昌則くんと、神谷（阿部）友子さんにも感謝を申し上げます。

還暦記念旅行　松本駅

還暦記念旅行　善光寺

◆いくつになっても夢は叶う

昭和53年卒　青木（今村）淳子

普段は大学で服飾文化を教えていますが、令和の代替わりの時に、テレビで皇后雅子さまの正装の解説をしたのを契機に、時々メディアで皇室女性のファッションについてコメントをさせて頂いています。また数年前からシャンソンを始め、去年2月に何とシャンソニエデビュー！同級生の神谷さん夫妻が応援に来てくれました。

5月銀座には、S44年卒の瀬戸さん、前田さん、萱原さん、同級生の添田さんと妹さんが、今年1月町田まほろ座には、S51年卒の内田さん、S45卒の古賀さん・甲賀さんが来て下さいました。応援してくれる明善先輩&同級生、友人、家族、そして毎日1万歩越えのお散歩で元気をくれる愛犬に感謝！克己・盡力・楽天で夢はかなう、としみじみ思う今日この頃です。

◆とある夫婦の朝の会話からの考察

昭和53年卒　井手　靖

夫（私のことです。）「明日からもう2月やね。早かねぇ。」

妻「そうよ、もうキャンプインよ。」（ちなみに妻も明善の同級生。プロ野球のことを言っております。）どこにでもある朝の夫婦の会話。（?）

会話の内容はともかく、年をとると1年がとても早く感じるようになっていませんか?この疑問に5歳のチコちゃんが答えてくれました。

「人生にトキメキがなくなったから」だと。〝ときめき〟とは「期待、心配、喜びなどの強い感情で胸がどきどきすること」（『日本国語大辞典』より）確かに不安や心配でどきどきすることはあっても、最近期待や喜びで胸がどきどきした記憶はあまりありません。（笑）むしろこの年になると胸がドキドキ＝病気か?と思ってしまいます。

先日、久しぶりの関東53会に参加。同級生との会話を大いに楽しみました。高校時代の話、お孫さんの話、そしていつもの病気の話などなど、とても高齢者の会とは思えないほど、賑やかで元気な同窓会でした。そこで発見！同窓会には、期待、喜び、そして不安解消の効能がある。〝ときめき〟がある。（変な意味ではありません。誤解なきよう。）明善高校で素晴らしい仲間と出会えたことに感謝申し上げるとともに、そしてまた会える日を楽しみに、首を長くして待っています。

◆総理からのお祝い状

昭和53年卒　江島　丘

昨年の秋、施設に入っているお袋が目出度く百歳となりました。其の為、私達兄弟家族でささやかな祝賀会を実施した時の話です。百歳を超えると、内閣総理大臣（岸田総理名）からのお祝い状と記念品が贈呈されます。ただ認知症が相当進行したお袋に岸田さんが誰かは当然認知されないでしょう。息子の事も数年前から認知しておらず、会いに行っても「どこのどなたか存じませんが」と、両手を合わせ、そのまま頭を垂れて気持ち良く寝てしまうのが常態です。

ところが記念だからとお祝い状をお袋に持たせ撮った写真を見て皆驚きました。その顔はいかにも誇らしげで、その瞬間だけ正気だった頃のお袋の顔に戻っていました。特に権威が大好きだった頃のあの懐かしいドヤ顔です（泣）。

晴れて岸田さんからのお祝い状は江島家一族の家宝に決定しました。このたび私も65歳を超え、高齢者の仲間入りです。出来ればお袋の様な、神の領域に近づけるお年寄りになりたいと思う今日このごろです。

◆60歳過ぎてからの挑戦

昭和53年卒　渡部昌則

現在、ユニバーサル・スタジオ・ジャパン（USJ）のクルーとして働いております。

大学卒業後40年間、IT系企業で働いておりました。定年間近の年に大阪本社へ単身赴任で転勤し、一人暮らしで自由に時間が使えることで、USJの年間パスを購入して遊びまくり、USJの魅力に取り憑かれてしまいました。

前職の会社では定年後も65歳の誕生年度の3月31日までは、シニア社員として働くことができ、私もシニア社員として働いておりましたが、2年前の1月末に思い切って、退社しUSJへ転職しました。ITの世界からエンターテイメントの世界へと全く違う世界への挑戦です。とはいえ前職でもマーケティング部でイベント企画やプロモーション企画を担当していましたので、自分には合っていると考えての挑戦でした。世界中からゲストが来園されます。円安の影響もあり今は7割以上がインバウンドのゲストです（パークの公式発表ではありません）。日本にいながら世界各国の方々とコミュニケーションがとれ、刺激的で楽しい日々を過ごしております。

◆聞こえてきます

昭和53年卒　小堀（宮崎）弘子

扉を開けるとそこは穏やかな日が差し込む静かな空間、というわけではありません。私が勤務する特養ホームは、なかなか賑やかなところです。

私はそこの事務員で、時には入所者の方に「お姉さん」と話しかけられ、昨日あったかのような何十年も前の話を延々と聞いていると、どこからか「青い山脈」を歌う歌声が聞こえたりします。

介護職員は何をするにしても声掛けをしてから行うので、その声やそれに反応する声があちこちから聞こえてきます。そんな声やその周辺の音を聞いていると自分も段々とそこに近づいている、今をしっかり楽しんでおかなくては、と思います。

◆茅ケ崎帰還

昭和53年卒　寺下裕介

18年前に、通算15年ほど居た神奈川から宮崎の会社へ赴任。宮崎は食べ物もおいしく、そのうえゴルフ環境もよいので、そのまま10年ほど居続け、こりゃ終の棲家は宮崎でよいかも、と思い始めた途端、次はいったこともない鹿児島にいけと。ならば飲み会に便利なところに、と家を借りたのに半年もせずにコロナ禍が始まり、飲み会もゴルフもなくまま3年。するとあと2年で定年なのに、次は青森へ赴任。ならば冬はスキー、それ以外はゴルフ！と楽しんでいたら、1年でまた茅ケ崎に戻れ！はぁ?で、一昨年16年ぶりに茅ケ崎に帰還しました。昨年に定年のはずが、まだ働けと会社にも妻に言われて、茅ケ崎帰還2年目の春です。

◆夢のネイチャーガイド

昭和53年卒　松本武久

4回の転職を経て落ち着いた先の職場の雇用契約は年度更新型の国立研究所。途中、組織改編や10年雇い止めなど、いくつもの解雇の危機を凌いでいたら、いつの間にか20年以上も1か所に勤続してました。そして世の中で言う定年退職の年齢を迎えたら、夢に描いていた北海道でネイチャーガイドになろうと考えていたのに、あと4年は続く予定のプロジェクトから抜け出せなくなってしまいました。

4年後、70歳になってからネイチャーガイドできるほどの体力と運転能力あるだろうか?夢は早めに叶えておくべきだったと後悔しつつも、まだ

夢を諦めてない自分に気付く毎日です。

◆65歳を迎えて

昭和53年卒　服部明実

65歳になり、これからどうありたいか考えた時、平凡な日々を送り何の特技もない私としては、とりあえず健康で楽しい毎日であればいいかな…と。

韓国ドラマは私の幸せタイム。健康（ダイエット?）の為に始めたウォーキングは、「じゅん散歩」のように色々な街をブラっとし、新しい発見や出逢いがあれば、それも楽しい時間。

20年程前から息子のママ友たちと始めた「三井島システム体操（介護の要らない体を作る体操）」。地味～な体操ですが、週1回、平均年齢68歳14名のグループで元気に楽しくやっています。この体操は全国区で、皆様にもおすすめですよ。

◆朝風呂万歳！

昭和53年卒　神谷友子

今日はリモートで在宅の主人が唯一出社する日。転職で一時自宅通いの次男も送り出した。ここからが至福の時間。昨夜バレエのレッスンで遅くなったのでゆっくり沸かし直しのお風呂につかる。朝シャン、そしてドライヤーをターボにしての洗面台独り占めｅｔｃ。7人家族で暮らしていたころ、これにどれだけ憧れていたことか。同居の嫁、3人の母親にまつわる雑事や役割に追われていた自分へのささやかなご褒美である。世代が変わるとともに自分の立場も変わっていくだろうがこれからは肩の力を抜いてやっていける気がする。先に逝った舅、姑が導いてくれるだろう。65歳も悪くない。

◆人と繋がって

昭和53年卒　米田（山上）裕子

明善では英語クラブＥＳＳに所属し楽しく活動し高3でＡＦＳ交換留学生となり1年休学したので、「65歳特集」に一瞬、自分の年齢を錯覚します。

最近あるきっかけから、久留米市役所ＨＰであの交響曲第九が日本人聴衆を前に日本で初めて演奏されたのは現・明善高校でのこと、と知りました。久留米に第一次世界大戦のドイツ人俘虜を受入れ交流した歴史があり、明善に国際交流の土台があったことを思うと先人との繋がりに感慨ひとしおです。

昨年退職した通翻訳業では22年間海外の方々と言葉と心を繋いできました。世界の平和を願いつつ推し活しつつ（！）親子3人楽しく暮らす昨今です。

◆卒業証書

昭和53年卒　添田（森光）俊江

数日前探し物で古いアルバムを開くと明善高校の卒業証書が。自分のかと見れば亡父の卒業証書。なぜここに?この原稿のタイミングに?父も父の兄弟も明善卒の先輩。娘の、関東で出会った結婚相手も明善卒。こんなにも明善にご縁があること、嬉しい思いです。

さて近況、地域ボランティア後、資格を取り自分に不向きな営業職に従事中。高校の時「狭き門より入れ」のフレーズに感化され、社交べたの私の中で難選択を始めるのはその頃からかもです。

53同期のうまいリユニオン運営のお陰で、長く集える楽しく豊かな時間を戴き、感謝です。

◆介護保険証

昭和53年卒　田之頭（可児）静子

65歳となって介護保険証を受け取り、「私、老人?!」とまだまだ若い気持ちでいた私は少々戸惑ってしまいましたが、皆様はいかがでしょう?

夫の転勤で九州を出て、早40数年。転勤族で根無し草の生活から縁もゆかりもない関東の土地に家を持ち、今ではすっかり根を下すこととなりました。

明善同窓会に参加するようになったきっかけは、以前勤務していた会社の先輩から関東支部があることをお話しいただいてからだったように思います。それから、関東支部、53期会、久留米での大同窓会へ参加させていただくようになりました。懐かしい人々とお会いできたり時には昔の謎が解けたりと、私には故郷を身近に感じられる場所となっています。

とうとう介護保険証を受け取る年齢となってしまいましたが、もうしばらく同窓会に参加できる機会を大切にしたいと思います

◆まだまだ進化中

昭和53年卒　山本清介

5年前に定年し、現在は嘱託のおじさんで、来年から週3日パートのおじさんになる予定です。

高校時代は野口五郎で卒業してエレファントカシマシとなり、その後の腹囲の進化により数年前は海外では出川哲郎に間違えられるまでに成長し、現在まだまだ進化中です。

何年か前に大学サークルの同窓会が久々にあり、想いを寄せていた女性の先輩に「清介くーん、変わり果てた姿になって」と言われ少しショックを受けております。

◆明善53会　ゴルフ同好会

昭和53年卒　村岡慶隆

この同好会も開始からそろそろ10数年を迎えようとしています。開始当初は半年に1回程度での頻度でしたが、還暦を過ぎた頃からは、少しずつ時間の余裕もでてきて、現在では3か月に1度の開催が定着しています。

今までの10数年を振り返ると、清里高原や八ヶ岳高原のコースでプレイし当日は近隣コテージに宿泊しバーベキューパーティーで盛り上がり、翌日は温泉に入り蕎麦を食して解散と1泊2日でのゴルフや千葉でのプレイ後には木更津の沖食堂（三代目沖食堂、木更津本店）に立ち寄ってラーメンと焼きめしを食べ久しぶりの久留米の味を懐かしく楽しんだのも良い思い出です。とくに最近は毎回ほぼ同じコースとして定着しつつある相模原市のゴルフ場に電車と倶楽部の送迎バスを利用し移動することで帰りは表彰式および反省会と称する飲み会を倶楽部バスの停留所の真ん前にある酒場で行い、あの時のショットはどうだった、あのパットはどうだったといった反省や「加齢とともに、飛距離が落ちた」「体が回らなくなった」「腰が痛い、膝が痛い」といった理由でスコアが落ちたといった言い訳がましいゴルフ談議に花を咲かせています。

反省会が終了する頃には加齢のせいでスコアが落ちたのくだりは、この同好会がスタートした時点のスコアと変わらないのではという結論で落ち着いて、また次回頑張ろうとお互いを励まし次のラウンド日程を決めて毎回散会しています。私にとって、この定期的なゴルフ&反省会は参加している友人たち、またそれ以外の同級生の近況や久留米の様子などの情報を得られる場であり、そして何より自分自身の心身の健康という面での刺激の場として大切にしていきたいと思います。

2023年4月8日　東筑波カントリークラブ

関東支部ゴルフコンペ開催

恒例の関東支部ゴルフコンペ今年も春・秋開催した。平日（金）の開催にも関わらず現役組も多数参加してくれました。今年も年２回春・秋開催を計画、春は５月23日（金）坂東ゴルフクラブで開催します。若い方々の奮っての参加をお待ちします。

▶第27回大会　2024年5月24日（金）

四街道カントリー倶楽部、15名4組

自己ベストスコアを叩き出した若手石永選手がダントツ見事優勝、次回HDは36→16。

順位	氏名（卒年）	TOTAL	HDCP	NET
優勝	石永 真一（H14）	93	36	58
準優勝	山口 光夫（S43）	97	30	67
第3位	本田 匡史（S55）	78	8	70

▶第28回大会　2024年11月8日（金）

市原ゴルフクラブ（西・東コース）、17名5組

中堅田中選手がネット69でベストスコアであったが初出場のため繰下げ準優勝、ベテラン江頭選手が繰上げ優勝になりました。

順位	氏名（卒年）	TOTAL	HDCP	NET
優勝	江頭 伸一（S44）	90	19	71
準優勝	田中 正光（H02）	85	16	69
第3位	江口 和條（S44）	95	22	73

す。同級生の大半が65歳を迎えた今後も全員が元気で3か月に1度の反省会（言い訳会）を楽しんでいけたらと思います。

学友会がスピンオフ会を開催

平成14年卒　黒岩　強

1月24日に、関東支部の若手の集まりである学友会主体で、スピンオフ会を学生を含む17名で開催いたしました。当初は参加者の皆様に緊張が見受けられましたが、時間が経つにつれて打ち解け、終盤にはほぼ全員が飲み物を片手に立って会話を楽しむほど、活発な交流の場となりました。

今回は特別ゲストとして、北川智子さん（H10卒・JAXA教育センター長）と緒方良行さん（H28卒・ボルダリング選手）をお招きし、会を盛り上げていただきました。お二人のお話は参加者の皆様の興味を惹きつけ、普段なかなか聞けない内容に刺激を受けている様子でした。参加者からは、「初めて参加したが、楽しかった！」「こんなに楽しい交流会ならまた参加したい！」「今まで参加に抵抗があった総会にも参加してみたい！」といった嬉しい声が聞かれました。

スピンオフ会は、明善卒業生の若手の輪を繋ぐことを目的としています。関東支部総会（以下、総会）には毎年１００名を超える卒業生が参加されますが、10代20代の参加者は10名弱、30代40代に至ってはほぼ皆無という状況です。今後も総会を継続していくためには、若手の参加者を増やすことが不可欠だと考えています。

年一回開催される総会以外の場で、若手の明善卒業生が気軽に交流できるコミュニティを形成することで、以下の効果が期待できます。

・東京在住の明善卒業生の横の繋がりの再生・拡大、縦の繋がりの新たな形成
・素晴らしい先輩方の存在の認知
・総会の認知度向上
・総会参加のハードル低下

これらの効果を通じて、若手の総会参加者アップに繋げたいと考えています。

若手の参加が増加すれば、総会全体の参加人数増加や盛り上がり向上に繋がり、年代を超えた先輩方との交流を通じた後輩へのアドバイスが、若手の活躍を後押しすると期待できます。ひいては総会の価値向上にも繋がり、卒業生が積極的に参加したいと思えるような会に発展していくと考えています。

このような草の根活動を継続・拡大することで、若手の輪、そして同窓会の輪を広げ、総会で叫ぶ白旆の歌をより力強いものにしたいと考えています。

第14回秋明戦開催

明球会関東支部　事務局長
昭和62年卒　久保田　葉

第14回となる秋田高校との交流戦は、今年も東京大学野球場にて開催されました。昨年以上に若手平成卒メンバーに厚みを増し、塚本、宮川（H29）、高尾（H26）、坂田（H25）、笛田（H25）、植木、小柳、船津（H23）、牛島（H23）で今年こそは3勝目をと臨んだ試合は、昨年の8対8大接戦ドロー以上の乱打線となりました。

1回表、先発は左腕笛田と坂田の同期バッテリー。令和卒4人を擁する秋田高校打線を0点に抑え上々の立ち上がり。1回裏、秋田高校甲子園投手佐藤を打込み見事5点先制。「よっしゃいける！」と。

残念ながら予想的中し、2回表味方のコントのようなエラー、バックネット裏からは別府関東明球会前会長のゲキ（ヤジ？笑）タイムリーを浴び5失点。あっという間の同点に。

更に3回表秋田強力打線につかまり、ホームランを含む6点を追加され11対5と逆転を許します。その間、明善昭和打線は老体に鞭打ち奮闘、立山（S62）が内野安打で出塁するも、津留、久光、久保田（S62）、佐々木（S61）、船越（S60）と凡退し、6回まで膠着状態。

往年の球児たち

迎えた6回表秋田の攻撃。1人で投げ抜いた笛田の疲れが出たところ強力打線につかまり、ホームラン3本含む7失点で18対5と突き放されます。これにて万事休すかと思いきや、「逆転の明善」の本領発揮。6回裏、昭和のラストバッター井上（S53）の内野安打を皮切りに令和打線が爆発、坂田、小柳の2塁打、笛田のホームランなど6点を返し18対11と猛追開始。

迎える最終回、秋田打線に2点を許し20対11と再び引き離されるも、7回裏先頭牛島の2塁打から塚本、宮川、高尾の連続タイムリー、笛田の2塁打、植木のタイムリー、小柳の2塁打と一気に7点を叩き出し20対18と肉迫します。もう一歩が届かず残念無念、ノーサイドで激戦に幕を閉じました。

その後場所を上野の居酒屋に移し、両校応援団も入交えての懇親会は健闘を讃え合い、笑い合い、応援歌を歌い合い最高の宴となりました。これにて2勝11敗1分け。3勝目がなかなか遠い。

若き球児集合

TEAM	1	2	3	4	5	6	7	R
秋　田	0	5	6	0	0	7	2	20
明　善	5	0	0	0	0	6	7	18

○学年幹事一覧（2025年3月現在）

学年幹事をお願いしている皆様です。
主な業務は、同期への情報展開、名簿（メールアドレス）の更新、定例幹事会への出席など。
空席の年次は選出して事務局までご連絡ご協力よろしくお願いします。

卒年	氏名（敬称略）
S41	別府秀喜（相談役）、古賀啓子
S42	長岡健
S43	山下政晴
S44	瀬戸渡（相談役）、岡崎 ヒサ子
S45	山口務（代表幹事）、古賀尚之（事務局長）
S46	本村龍史、江端智恵
S47	五十嵐恵美子
S48	津福一成
S49	牛嶋敏文
S50	古賀裕明
S51	内田直人（会長）、友池哲雄（副会長）
S52	船橋政裕
S53	石橋誠、青木淳子、井手靖
S54	雨森和広
S55	伊東美晃（副会長）
S56	秋永佳世（副会長）
S57	轟美孝
S58	安藤聡
S59	淡河英明
S60	井手秀明（ゴルフ委員長）
S61	尋木浩司（監査役）、溝上宗二
S62	津留正明 、久保田葉
S63	菅谷聡、泰山昌子
H01	原長亮
H02	寺崎隆行
H03	小松法仁
H04	山本竜二
H05	川島哲也
H06	高野寛之
H07	空席
H08	阪本幸司、灘仁美
H09-10	空席
H11	安河内武志
H12	川口誠敬
H13	空席
H14	黒岩強、石永真一
H15-21	空席
H22	佐藤政雄
H23-R06	空席

編集後記

30余年ぶりに久留米、母校明善を訪ね、記憶との違いや変わらぬ思いが綴られた。共感も多いはず。久留米市と郡山市の姉妹都市50周年、安積疎水が縁であったこと、思い出の明善新聞の話題が語られた。明善同窓との偶然の出会い、学友会若手同士の出会いなど新しい交流が始まったこと嬉しく感じた。53卒特集では元気に旅行会やゴルフで交流が進む様子、職場環境の変化を楽しむ様子など親しみ深く感じた。これからもいろんな出会いで、同窓生や同郷との繋がりがより楽しくなることを期待する。（NU）